

本明川（長崎県）の現地調査概要

- ・長崎県諫早市を流れる本明川では、台風や集中豪雨により、元禄 12 年の洪水や、昭和 32 年 7 月の「諫早豪雨（諫早大水害）」を始めとする水害が幾度も発生している。
- ・文献調査に基づき、過去の記録が残る地域において詳細情報を収集するため、長崎県諫早市で現地調査を実施した。

調査地点：長崎県本明川



出典：国土地理院

【諫早豪雨（諫早大水害）の概要】

- ・7月23日に九州南部まで南下していた梅雨前線が24日から25日早朝にかけて北上を始め、次第に活動を活発にしながら一旦長崎県北部まで北上し、さらに南下して諫早、熊本、延岡を結ぶ線に達し、停滞した。
- ・その上南西方向から温風が突入し、その先端が諫早上空に達し、諫早市が豪雨に見舞われ、1970箇所では山崩れが起きるなど（長崎県全体）甚大な被害が生じた。

▼諫早豪雨（諫早大水害）による諫早市の被災状況

死者、行方不明者	死者 494 名、行方不明者 45 名
負傷者	1,476 名
流失及び全半壊戸数	1,302 戸
床上浸水	2,734 戸
床下浸水	675 戸
田畑の流失・埋没、崩壊	805 町

出典：本明川水系河川整備計画（変更）（平成 28 年 3 月）[国土交通省 九州地方整備局 長崎県]

【諫早豪雨（諫早大水害）の被災状況】



▲流木が堆積した眼鏡橋



▲被災した諫早市街地



▲本明川上流沿川（湯野尾町）の流失した家屋



▲湯野尾町中島付近の流失した水田



▲八天町の倒壊した家屋群



▲浸水した小野島地区

出典：本明川水系河川整備計画（変更）（平成 28 年 3 月）[国土交通省 九州地方整備局 長崎県]

【諫早豪雨（諫早大水害）の被災状況】



▲眼鏡橋両岸の流失状況



▲7月26日朝の小野島新地付近



▲7月26日朝の小野島町付近



▲逃げ遅れた人の救出



▲孤立した屋根上から助けを求める人



▲空から見た多良岳の山崩れあと



▲激流に削りとられた本明川上流



▲流失した本野小学校あと



▲本野大林付近の山津波のあと

川まつり（諫早大水害追悼行事）
全市民が死の恐怖にさらされた運命の日から1年目を迎えた昭和37年7月25日、この日の諫早市は戸ごに叩きを掛け、水魔の犠牲となられた539名の御魂を慰め、水魔の犠牲者市民が祈りを捧げた。
この日は、市主催の合同慰霊祭も催され、夜には250個の球電球で飾られた後援車が置かれた万灯が御魂のようにはいで、一瞬諫早市全体から悲しみをたたえて、かと思おせる程の静寂安全が訪れた。
この1周年追悼祭が実施となり、毎年7月25日に開く追悼の諫早川まつりとなった。諫早市全町が多額のボランティアで準備して行われるも、諫早市民にとっては余りにも忘れることができない、歴史的行事であったからであろう。

調査第一課 古賀康正

出典：長崎工事 五十年のあゆみ[建設省 長崎工事事務所（昭和57年3月）]

① “あの日”を時間で追う

諫早大水害は、典型的な梅雨末期型の豪雨によるものとされている。

7月中旬は雨も降らず、梅雨も明けるかと思われる中、21日頃から小雨が降り続き、24日には徐々に雨が激しさを増し、25日を迎えることに。繰り返し発令された大雨警報、そして避難命令…。あの運命の日までの状況を時間で追ってみた。

ドキュメント「1957.7.25」

1957.7.21～

- 梅雨前線が九州まで南下
- 毎日のように、顕著な雷雨を長崎県内各地で観測。
- 諫早地区でも小雨が降り続く。

1957.7.24

- 梅雨前線が夜から九州を北上
- 雨がさらに強くなり、夜には特に激しい降雨に。

1957.7.25

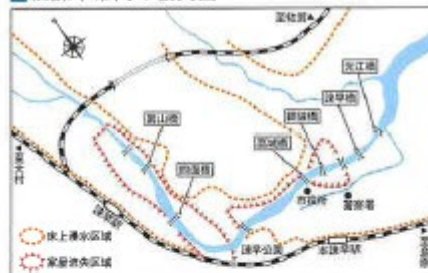
- 未明以降
 - 午前中
 - 午後1時～2時
 - 午後2時
 - 午後2時5分
 - 午後3時30分
 - 午後5時頃
 - 午後6時頃
 - 午後6時50分
 - 午後7時30分
 - 午後8時頃
 - 午後9時頃
 - 午後9時10分
 - 午後9時30分
 - 午後9時50分
 - 午後10時9分
 - 午後10時20分頃
 - 午後11時15分
- 梅雨前線が九州中部周辺まで北上。
 - 諫早地区は時間雨量10ミリ前後で少雨の傾向。
 - 状況は一転。旧諫早町の西部では時間雨量が160ミリと猛烈な大雨に。
 - 雨がだんだん激しくなる。
 - 大雨警報発令
 - 本明川の水位は、諫早市下で4mに達し危険水位3m20を突破。旭町周辺で床下浸水家屋が徐々に発生。本明川沿川では避難準備の動きも。光江橋は通行止め。
 - 本明川氾濫。旭町、本町、仲沖町、八天町で大規模浸水発生。警察、消防団が住民の救助に。
 - 雨はいったん小強状態に。本明川の水位も下降。その後、激しい雷雨に気象変化。
 - 1回目の避難命令のサイレン。高城町、本町周辺で家屋浸水。急激な増水により市内各地で家屋損壊・流失が続発。
 - 2回目の避難命令のサイレン。
 - 本明川上流域で山津波発生。押し流された土砂・流木等が濁流となって流下し、本野地区では壊滅的な被害が発生。
 - 永昌町駅前周辺で家屋流失。諫早市役所1階浸水。
 - 大雨警報発令。
 - 3回目の避難命令のサイレン。
 - 上宇戸橋が流失。
 - 電話不通。さらに大規模停電発生。
 - 本明川の水位がわずか10分間に約2m上昇。前後して、土砂流と雨水が含混した濁流が裏山橋、西面橋の一部を次々と破壊。その後、飯塚橋を急襲。流れてきた瓦礫や土石が雨鉄橋で堰き止められたことで、兩岸の高城町、八天町へ流れを変えて流下。被害を拡大させた。
 - 光江橋流失。

1957.7.26

- 午前0時30分
- 本町一帯で減水に転じる。

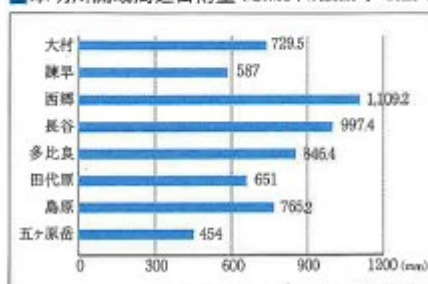


■旧諫早市内の被災図



※出典：(公社)日本気象学会機関誌「天気」

■本明川流域周辺日雨量(昭和32年7月25日9時～26日9時)



※出典：(公社)日本気象学会機関誌「天気」

▲被災時の時系列等

出典：諫早大水害60年写真集・体験者談[国土交通省長崎河川国道事務所 諫早市(2017年7月)]

【昭和32年7月本明川洪水痕跡標：長崎県諫早市高城町】

- ・諫早豪雨（諫早大水害）によって諫早市内の「高城公園」沿いに「本明川洪水痕跡標」と「いのりと書かれた乙女像」が建っている。並べて設置されている陶板には、水害被災写真や被災状況に加え、被災者による当時の状況が記録されている。

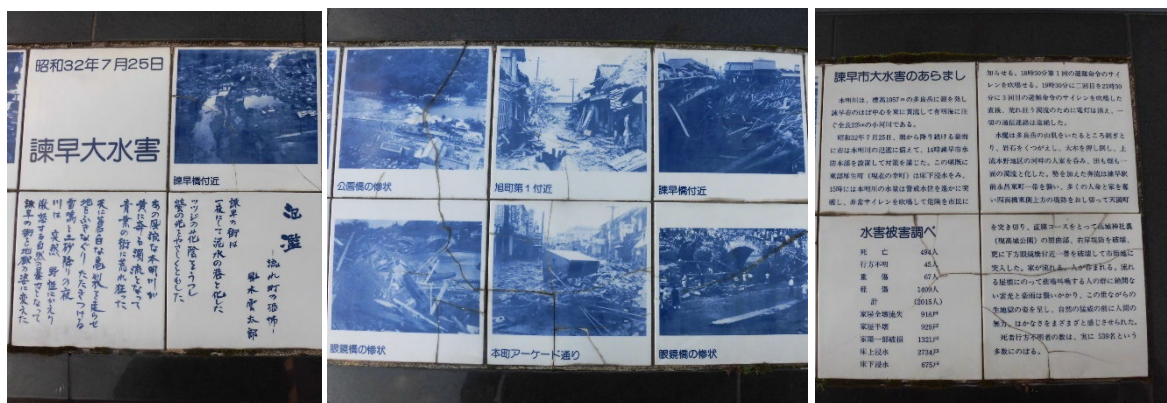


▲本明川洪水痕跡標の位置（長崎県諫早市高城町）



▲本明川洪水痕跡標（左）と乙女像（右）

令和3年2月22日撮影



令和3年2月22日撮影

■諫早大水害陶板より「15歳の思い出」山村和枝

その夜、私は夢中になって本を読んでいた。すると足の不自由な父が、「はき物が庭を流れて行きよっぞ!」と言ったので、みんなびっくりして外を見た。「家にいると危い」と母が言い、近くのたきぎを置いてある小屋に逃げることにした。

母が父を背負い私が仏様をもって、稲光りを頼りに妹と弟を連れ、はだしで家を出た。石ころだらけの山道、水はひぎまでである。妹は歩けないと言って泣く。母が私の名を呼ぶのでもどって見ると、父の重みに耐え兼ねて地面に降ろしている。父は水の中を猫のように、はいながら進む。1mぐらいの石がきを私と妹が上から手を引き、母が下から押し上げた時は、うれしかった。

父と母を途中の竹山に残し、私たちはたきぎ小屋にしばらくいたが、小屋が崩れだしたので、また30分ほど歩いて近所の家に着き、夜を明かした。道の途中で何回も、仏様にお参りをした。

私たちは父母が心配でたまらなかった。父母は私たちが流されないかと、とても心配したそうだ。

隣のおばさんの家では、母子三人が流された。かわいそうでたまらなかった。

【昭和32年7月水害復興記念碑：長崎県諫早市永昌東町】

- ・諫早豪雨（諫早大水害）によって諫早市内の「駅前公園」沿いに「水害復興記念碑」が建っている。
- ・この記念碑は、後世に憂いなき事を希って水神を祀り水神を祀り水害30周年を記念するとともに、水害による犠牲者への冥福を祈るものである。



▲水害復興記念碑の位置（長崎県諫早市永昌東町）



▲水害復興記念碑

令和3年2月22日撮影

■水害復興記念碑碑文

仲通り低地帯は、昭和32年7月25日諫早大水害に多くの人命と家財を失い、爾来例年水禍に脅かされ、茲に地元民は共に語り共に団結して、低地帯の悩みを解決し茲に其の完成を見、後世に憂いなき事を希って水神を祀り水害30周年を記念し（昭和62年）復興碑を建立、犠牲者への冥福を祈るものである。

資料：川の碑（川の碑編集委員会 編 1997.3.1）

【昭和32年7月水難殉難者供養塔・江川ミキ先生之像：長崎県諫早市城見町】

- ・諫早市内の「高城橋」のもとに「水難殉難者供養塔」が建っている。
- ・また、諫早市連合婦人会の初代会長であり、女性の社会参加の促進に尽力された方で、昭和32年の諫早大水害による身元引受人のない殉難者の為の納骨堂の建立にも尽力された江川ミキ先生を称える像が設置されている。



▲水難殉難者供養塔の位置（長崎県諫早市城見町）



▲水難殉難者供養塔



▲慶巖寺水位表

令和3年2月22日撮影



▲江川ミキ先生之像



▲江川ミキ先生之像に書かれた碑文

令和3年2月22日撮影

■江川ミキ先生之像碑文

江川ミキ先生は、明治三十年、諫早町に生まれ、戦後における女性の指導者として、初代諫早市連合婦人会会長に就任され、地域と一体となった婦人会活動による生活改善運動を積極的に推進され、また、婦人学校を通じて女性の社会参加の促進に尽力されるとともに、婦人会による奨学金制度の創設、昭和三十二年の諫早大水害による身元引受人のない殉難者のための納骨堂の建立に努力されるなど、二十五年の永きにわたり諫早市連合婦人会のゆるぎない発展の基礎づくりと、女性の地位の向上に大きく貢献され、平成二年諫早市名誉市民の称号を受けられました。

ここに先生の功績を称え、永く後世に伝えるため、本像を建立する。

(平成二十一年十一月 諫早市連合婦人会)

【昭和32年7月諫早大水害洪水水位標：長崎県諫早市八坂町】

- ・昭和32年7月25日の諫早豪雨（諫早大水害）時の洪水痕跡を印すものである。（平成19年7月20日建立）



▲水害復興記念碑の位置（長崎県諫早市八坂町）



令和3年2月22日撮影

▲諫早大水害洪水水位標

【元禄 12 年 9 月洪水の概要】

- ・元禄 12 年の 8 月 11 日から降り出した豪雨により同月 13 日に大洪水が発生した。この記載が旧暦であるため、今でいうと 9 月下旬に発生したものである。
- ・この水害は昭和 32 年 7 月の大水害と並んで最も被害の大きい洪水とされ、多数の溺死者と田畑、家屋を洗い流すほどの甚大な被害をもたらした。

▼元禄 12 年 9 月洪水による被災状況

溺死者	487 名
人家の流出	甚大
田畑の流失・埋没、崩壊	570 町余り 3,930 石

【元禄 12 年 9 月洪水の被災状況の記録】

- ・災害から 1 週間後の 8 月 21 日（旧暦）、佐賀から被害状況の視察にきた見分使との会談の記録

■見分使との会談の記録

「1. 今度、洪水にて相果候者、男女 487 名皆禅宗、浄土宗、一向宗、右三宗の者にて御座候。右三ヶ寺にて豊前より品付け候事。

1. 今度、洪水に逢ひ候家 97 籠介抱の儀。自分より申付候儀、其上、作事料の竹木、立山より差出し取らせ申候事。

1. 生残り候町人 300 龍会、自分に介抱手に及び申さず候。近年迷惑ながら当分飯米、家屋迄の儀、御上より御介抱仰せつけられ候様にありたく奉存候。竹木は自分立木より差出し可申候。但竹の儀口達。

1. 今度、流れ残り難儀に及び候者共へ、早速より飯米取らせ申候。不足に付で相談致し候処に置米差出され候故、弥よ介抱申付け候事。

1. 当秋米出来申候間、今 150 石程置米より差出され下さる可く候。家来、借又町人共飯米取らせ候へば、最前の百石にては不足に付て御相談仕候事」

出典：長崎工事 五十年のあゆみ[建設省 長崎工事事務所（昭和 57 年 3 月）]

【元禄 12 年 9 月洪水の史跡：大雄寺 五百羅漢】

- ・岩壁に刻まれた羅鑑像は元禄 12 年（1699 年）の本明川大洪水（犠牲者 487 名）、翌 13 年の大干ばつを契機に犠牲者の弔いと災害除難を悲願して、時の領主諫早家第 7 代茂晴公の発願によるものと伝えられる。
- ・岸壁には羅鑑像や如来像など五百数体が刻まれている。

（現地の説明資料「五百羅漢像の由来」より抜粋）



▲大雄寺 五百羅漢の位置（長崎県諫早市富川町）



▲五百羅漢像



▲改修工事の状況

令和 3 年 3 月 2 日撮影



▲大雄寺の五百羅漢像（石碑）



▲大雄寺の五百羅漢像（説明パネル）

令和3年3月2日撮影

■大雄寺の五百羅漢像（石碑の説明文より）

元禄12（1699）年8月13日、本明川の大洪水により諫早領は死者487名、稲3930石が減収という大きな被害を受け、翌年は逆に大干害で田畑は荒れ、人々は2年続きの災害のために苦しみ、領内には食物に飢える人が多く出ました。

このため、諫早家第7代茂晴公は、災害による犠牲者の冥福を祈り、また今後の災害を除くため、ここ水源の地・富川峡谷の岸壁に五百羅漢像を刻むことを発願しました。

長崎・大村・島原などの寄進を受け、元禄14（1701）年に製作にとりかかり、宝永6（1709）年に完成しました。

下絵は神代村常春寺の僧志元、彫刻は矢上村の石工鎌山甚兵衛、田結村の石工森与四衛門等によって行われました。

磨崖仏としては、県内随一のものであり、諫早の水害史を物語る資料として大変貴重なものです。

（平成5年3月建 長崎県教育委員会、諫早市教育委員会）

【昭和 57 年 7 月長崎大水害の概要】

- ・前線の北上に伴い、本明川流域では 23 日の夕方より降雨が始まり、夫婦木では、23 日 20～21 時の 1 時間雨量 114mm、同日 17 時～日 17 時までの 24 時間雨量が 472 mm という記録的な雨量となった。
- ・裏山地点では、HWL まで 0.61m の高さまで上昇し、一部堤防の低い箇所からの溢水が生じた。

▼昭和 57 年 7 月長崎大水害による本明川流域の被災状況

死者	3 名
家屋の全半壊戸数	13 戸
浸水家屋	2,408 戸

出典：本明川水系河川整備計画（変更）（平成 28 年 3 月）[国土交通省 九州地方整備局 長崎河川国道事務所]

1. 過去の被害情報(昭和57年)

- ◆前線の北上に伴い、本明川流域では23日の夕方より降雨が始まり、夫婦木では、23日20～21時の1時間雨量114mm、同日17時～24日17時までの24時間雨量が472mmという記録的な雨量となった。
- ◆裏山地点では、HWLまで0.61mの高さまで上昇し、一部堤防の低い箇所からの溢水が生じた。



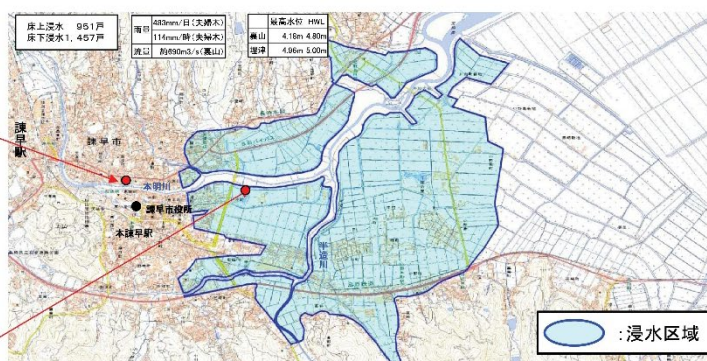
諫早市街地(高城橋付近)
仲沖地区



諫早市仲沖地区溢水による川裏崩壊



福田川の水防活動



0k800付近右岸の境内浸水状況(新地地区:24日10時頃)

【平成11年7月洪水（前線による大雨）の概要】

- ・本明川流域では23日の朝方より降雨が始まり、諫早雨量観測所では、9～10時の1時間雨量95mm、8時～11時の3時間雨量が227mmに及ぶ短時間で集中的な降雨が発生した。
- ・特に諫早市街地に集中的に降雨が発生し、内水被害が発生した。
- ・この大雨により長崎県では崖崩れが102箇所、道路冠水が18箇所が発生し、死者1名、家屋全壊1戸、床上浸水233戸の被害をもたらした。

▼平成11年7月洪水による本明川流域の被災状況

家屋の全半壊戸数	2戸
浸水家屋	711戸

出典：本明川水系河川整備計画（変更）（平成28年3月）[国土交通省 九州地方整備局 長崎河川国道事務所]

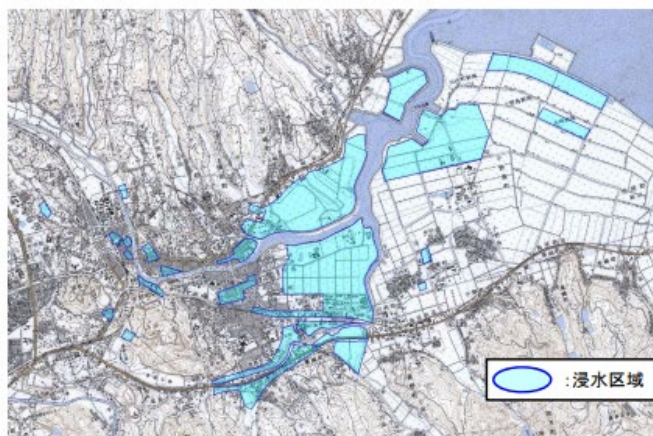
1. 過去の被害情報（平成11年）



- ◆本明川流域では23日の朝方より降雨が始まり、諫早雨量観測所では、9～10時の1時間雨量95mm、8時～11時の3時間雨量が227mmに及ぶ短時間で集中的な降雨が発生した。特に諫早市街地に集中的に降雨が発生し、内水被害が発生した。
- ◆埋津地点では、11時10分にHWL(5.0m)を越える。ピーク水位5.1mを記録した。



日雨量分布図
平成11年7月23日



上空より幸町（平成11年7月洪水）



諫早市八天町（平成11年7月洪水）



5

出典：本明川における水害リスクと流域治水の事例について[国土交通省 九州地方整備局 長崎河川国道事務所（R2.9）]

▼本明川水系既往洪水の概要

洪水発生年月		洪水被害の概要
寛永末年 (年代不詳)	1624年～ 1643年	本明川大洪水のため人家、耕地に被害。馬の鞍坂(天満町、円清田井原東側の丘)で手を洗うことができたと伝えられている。慶厳寺に溺死者のための供養碑がある。
元禄12年8月	1699年	本明川大洪水のため、溺死者487人。その他人家の流失、田畑の荒廃等の被害甚大。損失3,930石(この水害の供養のため、領主諫早茂晴が本明川の富川峡の巨岩に五百羅漢を作らせた。宝永6年(1709年)完成)
正徳元年	1711年	慶厳寺に溺死者供養塔があるが、詳細は不明。
文化7年6月	1810年	不意の大洪水で本明川唯一の石橋が流失。元禄12年の洪水と同じ程度と想定される。(この洪水を契機に眼鏡橋がつくられる。天保9年(1838年)に起工、天保10年に完成した。)
文化9年6月	1812年	大洪水により、市中の最高床上5尺5寸。流家、半倒壊多数。橋流失、堤防決壊、田畑水損等の被害甚大。
明治44年9月	1911年	豪雨により、諫早、大村で死者11名、行方不明者2名、家屋全・半壊52戸、破損275戸、流失16戸、床上浸水370戸、床下浸水253戸、その他堤防、道路、橋、田畑の被害多し。
大正3年8月	1914年	氾濫面積285町、負傷者3名、堤防決壊273ヶ所等の被害を受けた。
大正11年9月	1922年	豪雨(前線)により、諫早の雨量502mm(3日～9日)。被害の状況は不明。
昭和2年9月	1927年	暴風雨(台風)により、本明川が氾濫し諫早は泥海一大修羅場と化す。北高来郡の被害は死者16名、行方不明者1名、住家の全・半壊274戸、流失(一部流失も含む)66戸、住家浸水2,346戸等の被害を受ける。
昭和5年7月	1930年	暴風雨(台風)により、長崎県下で死者47名、行方不明者33名、諫早では、真崎、有喜、本野、小栗小学校の校舎倒壊(洪水:風水害年表)
昭和23年9月	1948年	豪雨(低気圧)により、本明川が氾濫。長崎県下の被害は、死者39名、行方不明79名、家屋の全・半壊99戸、流失64戸、家屋の浸水5,973戸等であった。
昭和24年8月	1949年	暴風雨(ジュディス台風)により、北諫早の雨量(15～17日)320mm。諫早市*の家屋浸水700戸、列車不通。また、海水浸水で農作物の被害甚大であった。
昭和27年7月	1952年	諫早市*で堤防決壊1箇所、家屋浸水118世帯、水稻冠水150町歩。
昭和27年9月	1952年	諫早市*で家屋全半壊3戸、床上浸水88戸、水田冠水146町歩、堤防決壊13箇所。
昭和28年6月	1953年	諫早市*で死者2名、床下浸水92戸、田畑冠水265町歩。
昭和28年7月	1953年	諫早市*で死者2名、家屋全壊2戸、床下浸水92戸、田畑冠水475町等の被害を受けた。
昭和29年6月	1954年	諫早市*で床上浸水2戸、床下浸水304戸、田畑冠水914町歩等の被害を受けた。
昭和30年4月	1955年	豪雨(前線)により、諫早市*で床上浸水24戸、床下浸水377戸、田畑の流失・埋没21.5町等の被害を受けた。
昭和31年8月	1956年	暴風雨(台風)により、諫早市*で死者4名、住家全壊86戸、半壊145戸、水田冠水120町等の被害を受けた。
昭和32年7月 (諫早大水害)	1957年	豪雨(梅雨)により、諫早市*で死者494名、行方不明者45名、負傷者1,476名、住家の全壊・流失727戸、半壊575戸、一部破損919戸、床上浸水2,734戸、床下浸水675戸、田畑の流失・埋没、崩壊805町等の甚大な被害を受けた。
昭和37年7月	1962年	豪雨(梅雨)により、本明川流域で負傷者14名、家屋の全壊流失62戸、半壊25戸、床上浸水2,262戸、床下浸水8,058戸の被害を受けた。
昭和57年7月 (長崎大水害)	1982年	豪雨(梅雨)により、本明川流域で死者3名、負傷者1名、家屋の全壊2戸、半壊11戸、床上浸水951戸、床下浸水1,457戸の被害を受けた。
平成11年7月	1999年	豪雨(梅雨)により、本明川流域で家屋の全壊1戸、半壊1戸、床上浸水240戸、床下浸水471戸の被害を受けた。
平成23年8月	2011年	豪雨(前線)により、本明川流域で家屋の床上浸水5戸、床下浸水24戸の被害を受けた。

(注) このページの「市町名*」は、平成17年3月1日に行われた県央地区1市5町の合併前の名称にて整理しています。

出典：本明川水系河川整備計画(変更)(平成28年3月)[国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所]

1. 白川の概要
1.2 治水の沿革

表 1.2.1 主要な既往洪水被害一覧表

洪水発生年月日	要因	流域平均2日雨量 (代継橋上流)	代継橋水位 観測所水位	被害概要
昭和28年 6月25～28日	梅雨前線による豪雨 【現在の治水計画の目標 となっている洪水】	552.9mm	不明	死者行方不明422名、流失全壊家屋2,585戸、半壊家屋6,517戸、浸水家屋31,145戸、橋梁流失85橋、田畑の流失埋没1,372ha、冠水2,980ha、罹災者数388,848人
昭和32年 7月25～26日	前線による豪雨	257.3mm	3.55m	熊本市で死者行方不明83名、家屋の流失・全壊・半壊348戸、床上浸水8,627戸、床下浸水7,308戸、橋梁流失16橋
昭和37年 7月7～8日	—	226.0mm	3.62m	坪井川増水、井芹川堤防が決壊し、花園、寺原、世安町の低地で1,000戸が浸水
昭和38年 8月16～18日	低気圧、温暖前線による豪雨	359.9mm	4.78m	熊本市で床上浸水860戸、床下浸水1,837戸、堤防決壊14
昭和40年 6月30～7月3日	梅雨前線による豪雨	316.3mm	4.97m	家屋倒壊4戸、床上浸水340戸、床下浸水651戸、一の宮署管内で床上3戸、床下45戸、2日夜から3日朝にかけて、白川、井芹川、坪井川が氾濫、床上20戸、床下250戸で白川の安己橋が折れ曲がり、11日に崩壊
昭和55年 8月29～31日	前線による豪雨（台風の 影響）	416.4mm	5.88m	流域関連市町村の被害は死者・行方不明1名、家屋の全半壊18戸、床上浸水3,540戸、床下浸水3,245戸
平成2年 7月1～3日	梅雨前線による豪雨	379.0mm	5.79m	流域関連市町村の被害は、死者・行方不明14名、家屋の全半壊146戸、一部破損250戸、床上浸水1,614戸、床下浸水2,200戸
平成9年 7月6～13日	梅雨前線による豪雨	406.8mm	4.59m	流域関連市町村の被害は、家屋の一部破損3戸、床上浸水68戸、床下浸水664戸
平成11年 9月24日	台風18号による高潮被害	—	—	床上浸水7戸、床下浸水37戸、浸水面積11.3ha
平成19年 7月6～7日	梅雨前線による豪雨	318.7mm	4.93m	熊本市街部において、「避難準備情報」が発令
平成24年 7月12日	梅雨前線による豪雨	393.6mm	6.32m	白川沿川の被害は、家屋の全半壊183戸、床上浸水2,011戸、床下浸水789戸

※ 被害の概要は「昭和28年西日本水害調査報告書（土木学会西部支部）」、「熊本県災異誌（熊本地方気象台）」、「防災・消防・保安年報（熊本県）」、出水記録および熊本河川国道事務所調査結果による。
平成24年7月洪水は国土交通省及び熊本県による調査結果。
※ 被害の数値には内水被害、土砂災害を含む場合がある。

1. 川内川の概要

1. 2 治水の沿革

(1) 水害の歴史

川内川の史実に基づく一番古い洪水は、「続日本書記」及び「大日本史」に記載されている天平18年10月5日（西暦746年）の洪水で、古くから人や家畜の死傷、家屋の埋没・流失といった惨事が幾度ともなく繰り返されてきました。

昭和年間以降の主な洪水は下表のとおりで、主に梅雨性及び台風性に起因する洪水被害が頻発しています。

表 1.2.1 川内川流域の主な洪水

洪水発生年	原因	流域平均 12時間雨量	流量 (川内地点)	被害状況
昭和2年8月11日	豪雨 (台風性)	-	-	浸水家屋 約3,000戸 (川内町調査のみ)
昭和18年9月19日	台風	-	-	家屋全半壊・流失 144戸、 浸水家屋 3,333戸
昭和29年8月18日	台風	133mm	約2,900m ³ /s	死者(13名) 家屋全半壊・流失 (8,578戸)、 床上浸水(2,102戸)、床下浸水(10,236戸)
昭和32年7月28日	梅雨	230mm	約4,100m ³ /s	死者・行方不明者(6名) 家屋全半壊・流失 (30戸)、 床上浸水(1,433戸)、床下浸水(7,689戸)
昭和44年6月30日	梅雨	152mm	約3,600m ³ /s	死者・行方不明者(52名) 家屋全半壊・流失 (283戸)、 床上浸水(5,874戸)、床下浸水(7,448戸)
昭和46年7月21日	梅雨	136mm	約4,100m ³ /s	死者・行方不明者(12名) 家屋全半壊・流失 (347戸)、 床上浸水(3,583戸)、床下浸水(8,599戸)
昭和46年8月3日	台風	206mm	約4,900m ³ /s	死者・行方不明者(48名) 家屋全半壊・流失 (662戸) 床上浸水(3,091戸)、床下浸水(9,995戸)
昭和47年6月18日	梅雨	239mm	約6,200m ³ /s	死者・行方不明者 7名 家屋全半壊・流失 357戸、 床上浸水 1,742戸、床下浸水 3,460戸
昭和47年7月6日	梅雨	136mm	約3,200m ³ /s	死者・行方不明者 8名 家屋全半壊・流失 472戸、 床上浸水 695戸、床下浸水 1,399戸
平成元年7月27日	台風	223mm	約4,200m ³ /s	家屋全半壊・流失 45戸 床上浸水 171戸、床下浸水 702戸
平成5年8月1日	豪雨	190mm	約5,300m ³ /s	家屋全半壊・流失 13戸、 床上浸水 170戸、床下浸水 423戸
平成5年8月6日	豪雨	188mm	約4,200m ³ /s	家屋全半壊 9戸、 床上浸水 102戸、床下浸水 410戸
平成9年9月16日	台風	190mm	約3,500m ³ /s	家屋全壊・一部破損 3戸、 床上浸水 261戸、床下浸水 223戸
平成17年9月6日	台風	185mm	約4,200m ³ /s	家屋一部破損 12戸、 床上浸水 37戸、床下浸水 144戸
平成18年7月22日	梅雨	295mm	約8,400m ³ /s	死者 2名 家屋全半壊・流失 32戸、 床上浸水 1,816戸、床下浸水 499戸

注1) 被害状況欄の()書は、鹿児島県全体の値(鹿児島県調べ)によります。
 注2) 昭和32年から平成9年間の被害は、出水記録 九州地方建設局によります。
 注3) 出典：出水記録 九州地方建設局、川内川五十年史、鹿児島県災異誌、平成18年度川内川洪水痕跡調査
 注4) 流量は、川内地点で実際に観測した値に、上流域のはん濇で溢れた量とダムの洪水調節で減らした量を加えた推算値である。